

# 教師夏目金之助の研究（十四）

## —教師生活の外面と内面—

森 下 恭 光

### 緒 言

本論文で明らかにしたいことは、明治二十六年、高等師範学校講師として始まり、明治四十六年、東京帝国大学講師、第一高等学校講師の職を辞し、朝日新聞社に入社するまでの約十五年に及ぶ夏目の教師生活がその外面と内面においてどのように推移したかということにある。

とくに、外面的にあらわれる部分としては、その職場である学校において、彼がどのような姿を見せていたかを主に彼の授業を受けた者達の印象を談話記録を基にして明らかにし、内面的部分としては、彼自身が友人や門下生に宛てた書簡に見られる告白を基にして明らかにして行く。なお、本論文の一部には、すでに発表した十三篇の論文の内容と重複する部分が出てくることを予めご承知いただきたい。

—

夏目が自身を教師に適する資質を持っていると考えていないことを公言した場としてよく知られているのは、大正三年十一月二十五日に学習院補仁会<sup>(1)</sup>主催で行われた『私の個人主義』と題する講演会であった。そこで彼は、講演の主旨としてではなく、前置きとして、作家である前の職業であった教職に就くに至った経緯の中に学習院への就職もあり得たことに触れ、結局は高等師範学校に就職することになったことを話題にしている。

明治二十六年七月十日、帝国大学文科大学英文学科の第二回生として卒業した夏目は、引きつづき大学院に進学するが、経済上の必要もあって就職を考える必要があった。その彼を高等師範学校に推薦したのは当時の文科大学長外山正一であった<sup>(2)</sup>。そして、就職先の高等師範学校（明治五年創立）の校長は、嘉納治五郎<sup>(3)</sup>であり、その嘉納の面会を受けた夏目は嘉納に対し、「そうあなたの様に教育者として学生の模範になれというような注文だと、私にはとても勤まりかねるから」<sup>(4)</sup>と逡巡したことを話題にしている。それでも結局、同年十月には同校の英語授業嘱託となり、週二回出勤で、年俸四百五十円を与えられることとなる。月給にすると三十七円五十銭である<sup>(5)</sup>。

ここで注目されるのは、夏目が嘉納に対して「教育者として学生の模範になれというような注文だと、私にはとても勤まりかねる」と答えたことである。嘉納が夏目に対して注文した内容がどのようなものであったかはここでは明らかにされていない。しかし、英語教師としての採用であることを考えれば、夏目に対して英語教師としての資質にかかわる注文であったと推測することは難しい。当時わが国で英文学について最高学府である帝国

大学文科大学で英文学科を卒業し、しかも優秀な成績で卒業した夏目に対して英語教師としての能力に疑問を持つことなどは有り得ないと考えるのが妥当である。それ以外の注文ということになると、それは人格面に対するものと考えることができるが、夏目の人格面について問題ありとする情報が予め伝えられていない限り、面会したばかりの相手にそのような意味を込めた注文をすることも考え難い。結論的に言うならば、この場面における夏目の反応は過敏というべきであり、その反応に嘉納が驚いた様子は、夏目自身のことばで講演の中で伝えられている<sup>(6)</sup>。

ここで触れて置くべきことがある。それは、夏目は、帝国大学学生であった明治二十五年十二月、彼は文科大学教育学論文として「中学改良策」<sup>(7)</sup>を執筆していることである。二万字をはるかに越える論文の中で注目されるのは第三編にある中学改良策である。その第二に、教師の改良、教員の資格と題して、「当今尋常中学校の教師には何処にて修行したるや性の知れぬ者多く僅かの学士及び高等師範学校卒業生を除けば余は学識浅薄なる流浪者多し」<sup>(8)</sup>と、まず当時の尋常中学校の教師が例外を除けば資質に欠ける者の多いことを指摘している。

現況を示した上で行う彼の提言は次のとおりである。

「今日の急務は可成理科文科出身の学士をして少なくとも半年間教授及び訓練の方法を講究せしめたる上又半年間実地見習いとして地方の中学校に準教師となり然る後之を中学教員に採用するか或は高等師範学校の程度を高めて充分学識ある卒業生を養成し之に中学教育の事を托すべし」<sup>(9)</sup>

次に、「教員道德上の資格」と題して、その欠点を二種類に分けてあげている。その第一は、「個人として道德高からざる事」<sup>(10)</sup>であり、その第二は、「中学教員として徳義完からざる事」<sup>(11)</sup>であるとし、それぞれについて改良策を提言している。その要点は、第一の欠点を改良する策としては、「大学の教授及び高等師範学校の教授等は（中略）道德高き教員を製出する事に尽力すべ」<sup>(12)</sup>きであるとし、また、第二の欠点を改良する策としては、「一方にては教員の資格を厳にして無頼の徒を退去せしめ一方にては之が俸給を増加して且つ終身官たらしめ安んじて力を教育に尽さしむべ」<sup>(13)</sup>きであると提言している。

夏目がこの論文を執筆したのは、彼が帝国大学文科大学英文学科の学生として履修した科目に教育学があり、その課題論文として提出するためであった。明治二十六年七月十日発行の卒業証書を見ると教育学担当者として日高真実の名が確認される<sup>(14)</sup>。

ここに引用した夏目の「中学改良策」を読むと、それが高等師範学校に就職する前年に執筆されたものであり、しかも、高等師範学校における教育に期待される内容として、「道德高き教員を製出する事に尽力」すべきことがあげられていることが確認されることは意味あることとしなければならない。

夏目からすれば、嘉納が口にした「教育者として学生の模範になれ」という意味の注文は、通常の挨拶として受け流すには重すぎる意味のことばであったのではないかと推察することもできるであろう。そのように解するならば、「私にはとても勤まりかねる」とことばを返したのは過敏反応とばかりで片付けられないものがある。このような経過を経て、とも角も夏目は高等師範学校の教師に就任し、友人で当時金沢市在住の狩野亨吉<sup>(15)</sup>に宛てて「生義兼て御出京中は種々御配慮を煩わし候処其後高等師範学校英語教授の囑託を受

け去る十九日より出講仕居候えは乍憚御安意可被下候」<sup>(16)</sup>との文面の書簡を十月二十七日付で送っている。この後、夏目が高等師範学校において如何なる心境で職務に服していたかをうかがわせる書信は一切見当たらない。明治二十二年一月より第一高等中学校本科一部（文科）の同級生として知り合ってより親交があり、頻繁に書信を交わして来た正岡子規（本名常規）との交信にもそのことについて触れたものはない。この時期、彼は大学院に籍を置いており、住居も帝国大学寄宿舎になっているところから、彼の生活のすべてが教師生活に傾注されていたとは考えにくく、書信に教師生活に触れてるものが皆無であるのはその辺に原因があるとも推測される。

唯一、高等師範学校に在職中の心境を彼自身が吐露したものとしては、先に引用した『私の個人主義』と題する講演の中で、「教育者として偉くなり得るような資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどうも窮屈で恐れ入りました。中略。何うあっても私には不向な所だとしか思われませんでした。」<sup>(17)</sup>と述べている箇所をあげることができるに過ぎない。

親友正岡子規に宛てて明治二十七年九月四日付けで送った書簡はかなり長文であるが、その中に「学問の府たる大学院に在って勉強すべき時間はありながら勉強の出来ぬは実心苦しき限に御座候此三四年來勉強というほど勉強をした事なく常に良心に譴責せらるる小生の心事は傍で見る程気楽な者には無之候然し申訳の為暇さえあれば終日机に向う処幾分か殊勝に御座候」<sup>(18)</sup>とあることによって、当時における夏目の生活の一端を知り得よう。

ところで、夏目の東京での教師生活は高等師範学校においてばかりではなく、帝国大学在学中の明治二十五年五月より東京専門学校において学資補給のため教鞭をとり、明治二十八年まで勤めていた。小宮豊隆によれば、明治二十五年当時学生として夏目の講義を受講した網島梁川（本名栄一郎、1873—1907）は同年五月六日の日記に「午後始めて新講師夏目氏のピーカーの講義を聞く。弁舌明快ならず、講釈の仕方未だ巧みならずと雖も、循々として穏和に綿密に述べらるる処や、大西氏<sup>(19)</sup>に似たるところありて、未だ麻姑搔痒の快を与えざれども、又その不明の雲霧を散ずる感あらしむ。兎に角可なりの講師と評すべし。」<sup>(20)</sup>とその講義に対する評価を加えている。

また、この時期のことを夏目は、十二月十五日付の正岡子規宛の書簡で、同校で自分に対する辞職勧告運動が学生によって起こされたが学校側から特に沙汰のないこと、一方では、受持時間2時間のところを3時間やってくれとの生徒からの要望があることから左程評判が悪いわけでもないことなどを伝えている<sup>(21)</sup>。文面からうかがえるのは、東京専門学校での英語講師としての生活は、就職としてではなく、学生としての身分を主とする副業としての営みとしてとらえているということである。

明治二十八年四月、いよいよ夏目は高等師範学校と東京専門学校を辞して、東京を離れ、愛媛県尋常中学校に赴任する。辞令には明治二十八年四月十日付で「愛媛県尋常中学校教員ヲ嘱託ス」<sup>(22)</sup>と記されている。当校への就職を仲介したのは親友の菅虎雄<sup>(23)</sup>であった。月給八十円は校長のそれより二十円高く、破格の待遇であった。夏目が東京を離れ、地方都市松山に赴いた理由は失恋説など種々あげられてはいるものの定説はない。

任地の松山で夏目が最初に書簡を送った相手は狩野亨吉であった。明治二十八年四月九日付の葉書で、「七日発今九日午後二時頃当市へ著仕候右安著の御報告まで」<sup>(24)</sup>と書き送っ

ている。

この文面でも察しられるように、夏目はきわめて几帳面な性格を持ち、出発日と到着日時まで報告するところがそれを証明している。

一月後の五月十日には、同じく狩野亨吉に宛て「当地着以来教員及び生徒間との折合もよろしく只煩鎖なるに少々閉口致すのみ」<sup>(25)</sup>と書き送っている。同じ書簡の末尾に、「当地到着後高等師範生徒より謝状を遣わし候師弟の関係薄き今日殊更不肖小生の如き者に対し斯様の挙動ある事ありがたき次第世の中は全く見捨てたものにも無之候」と書き加えているところによって、不明な点が多い高等師範学校の学生との師弟関係の一端を知ることができる。

次にあげるのは、夏目が任地として松山を選んだ目的を自身で表明しているものとして注目される書簡である。七月二十六日付けで、旧友の齋藤阿具に宛てた書簡の中で彼は言う、「小生当地に参り候目的は金をためて洋行の旅費を作る所存に有之候処夫所ではなく月給は十五日位にてなくなり申候」<sup>(26)</sup>誇張はあるにしても率直な気持の表明であることは、他の資料によっても明らかである。

この書信を認めた約一ヶ月後、八月二十七日に正岡子規が郷里松山に帰って来、夏目の下宿（松山市二番町八番戸上野方一いわゆる愚陀佛庵）に同居する。十月十九日に松山を発ち上京するまで正岡は同所で、夏目を加えて運座を始め、夏日も熱心に句作に励んだ。

正岡が去り、着任より半年余りが経過した十一月七日、夏目は上根岸に住む正岡に宛てて書簡を送り、その中に「此頃愛媛県には少々愛想が尽き申候故どこかへ巢を替えんと存候今迄は随分義理と思ひ辛防致し候えども只今では口さえあれば直ぐ動く積りに御座候貴君の生れ故郷ながら余り人気のよき処では御座なく候」<sup>(27)</sup>と記している。

着任して半年余りでの心境の変化としては、極端なものがある。「義理と思ひ辛防」したとか、「余り人気のよき処では」ないとかの文言は、親友の正岡に対してであるから用いたとも言えるにしても快く読めるものではない。

夏目の心境がそのような急速に後退して行った松山の尋常中学校で彼の指導を受けた者達の印象はどのようなものであったかを次に見る。

まず、眞鍋嘉一郎は、夏目の授業態度を評して「能弁とか達弁とか云うのではないが、非常に言葉の綾に富んだ話しぶり、誠に明快を極め、熱心で正確で、其口吻が当時十七八歳だった自分の頭裡に刻せられて今だにありありと残っている。」<sup>(28)</sup>と絶讃している。英語の得意であった生徒と自認している眞鍋の評語ではあるが情景は想像でき、中学の英語教師としては別格の資質を持っていたことがうかがわれる。そのような夏目であったから、「生徒間にも、あんないい先生が松山なぞへ来たのは、道後の温泉がある故、保養少々教鞭をとるに過ぎないなぞと言われていた。」<sup>(29)</sup>と回想している。また、夏目が俳句に熱心であることにも気付いており、「試験の時や、作文の間などには、教室でも頻りに俳句の本を読んでいた。」<sup>(30)</sup>とも述べている。

同じく松山で夏目に英語の指導を受けた松根東洋城（本名豊次郎）は次のように回想している。とくに、英語の教授法に触れた部分において「其英語の教授法についても至れり尽せりて先生の学識が広く高かったからであろうが、其事に従わるるや極めて忠実で親切でしかも生徒の智識能力を量ってよく了解のゆく様によく納得するように教えられた。私

などは特別に語学が好きと思う方でもなかったが、先生に教えて戴いてからは英語は面白いものだと心底から感じ出した。」<sup>(31)</sup>と述懐している。真鍋のばあい、英語の得意な生徒として夏目の指導を受け、そのばあいでの評語であったのに対し、松根の評語は、英語が得意というわけでもない、いわゆる普通の生徒の立場での評語であるところに意味がある。

両者の評価で共通するのは、夏目が中学校の英語教師として卓越した資質を持つ存在であったということである。

先に引用した教育学論文「中学改良策」(明治二十五年執筆)において、中学校の教師の資質が低い現状を指摘し、その改良策を提言しているが、夏目は自身の行った提言を意図的ではないにしても結果的には松山の中学校の英語教師として、中学校の英語教育はこのように行われるべきとの実例を示したとも言えることが、引用した両者の回想の形をとった評語によって知り得る。

もちろん、わずかに二人の評価によって、夏目に対する全体の評価とすることはできないが、現実に印刷物として残されたものとして入手できるものが限られている以上止むを得ないこととしなければならない。

愛媛県尋常中学校在職中に夏目が公にした文章がある。明治二十八年十一月二五日に発行された校友会雑誌『保恵会雑誌』に掲載された『愚見数則』<sup>(32)</sup>がそれである。

そこには、先に引用した生徒の夏目に対する憧憬の念にも似た想いの表明があったのに対し、説教調で刺激的な文言が連ねられている。

「余は教育者に適せず、教育家の資格を有せざればなり、其不適當なる男が、糊口の口を求めて、一番得易きものは、教師の位地なり、是現今の日本に眞の教育家なきを示すと同時に、現今の書生は、似非教育家でも御茶を濁して教授し得ると言う、悲しむべき事実を示すものなり、世の熱心らしき教育家中にも、余と同感のもの沢山あるべし、眞正なる教育家を作り出して、是等の偽物を追出すは、国家の責任なり、立派なる生徒となって、此の如き先生には到底教師は出来ぬものと悟らしむるは、諸子の責任なり、余の教育場裏より放逐さるときは、日本の教育が隆盛になりし時と思え。」<sup>(33)</sup>

この文章が印刷物となり愛媛県尋常中学校の教職員、保護者、そして生徒達の眼に触れる時点での夏目はいうまでもなく同校の現職教員であり、しかも次の職場が決定しているわけでも話が進行しているわけでもなかった。そのような背景を考える時、何故このような刺激的な文章を公表したのか理解し難いところがある。

この時期における夏目に関する一身上の出来事としては、十二月に上京し、十二月二十八日、貴族院書記官長中根重一<sup>(34)</sup>の長女鏡子(十九歳)との見合いがある。その折に夏目は、見合いの席で齒ならびの悪いのを隠そうとしなかった鏡子の率直さにひかれ、<sup>(35)</sup>鏡子は、漱石の写真を見て「上品でゆったりしていていかにもおだやかなしっかりした顔立ちで、ことのほか頼もしく見え」<sup>(36)</sup>、すっかり気に入った。鏡子の父重一も夏目を見て、「夏目君は将来きっと偉くなる」<sup>(37)</sup>と大いに満足したという。見合いは上首尾で、事実上の婚約となる。

翌年になり、夏目の一身上に変化が起こる。熊本の第五高等学校への赴任である。前年、第五高等学校教授として赴任した菅虎雄の仲介によるものであった。夏目の希望も鏡子の父中根の希望も東京での勤務にあったが、適当な就職先が東京に見当たらない為、熊本行

きが決定する。

## 二

明治二十九年四月九日、講堂において告別式が挙行され、夏目は松山を去る。松山を去ったとはいえ、夏目は一年間勤務した職場に対して、絶縁するような去り方をしたわけではなく、四月十六日、五月十六日の二回、同僚であった横地石太郎<sup>(38)</sup>に宛てて後任の英語教師を紹介する書簡を送っている。

第五高等学校講師に就任した夏目の月給は百円であった。六月十日、前年見合いをした中根鏡子（二十歳）と挙式。夏目は三十歳である。結婚して間もなく同年七月には教授に任命される。

新婚早々の時期に夏目は妻鏡子に一つの宣告を下したという。「俺は学者で勉強しなければならないのだから、おまえなんかにかまってはられない。それは承知しててもらいたい」<sup>(39)</sup>というのがそれである。また、一緒に外出することも学生に見られのがいやだといって散歩や買物さえも共にすることはまずなかった<sup>(40)</sup>。

鏡子の述懐によれば、月給百円もその十分の一は製艦費などの軍事費として差し引かれ、貸費生であった時の返済金が毎月七円五十銭、月々父へ十円、姉へ三円の送金があったので、毎月平均三十円は月給から減った上に、月二十円位の本代が出費としてあったので、家計にゆとりはなかった<sup>(41)</sup>。

この年の暮、夏目は教師をやめて上京することを考え中根に相談している。その願望は翌年（明治三十年に持ち越され、中根より東京高等商業の口があると伝えられるが断る。しかし、この願望は、この後も時折発生する。にもかかわらず、結果的には、三十三年五月、英語研究を目的とするイギリス留学を文部省より命ぜられるまで、第五高等学校を離れることはなかった。この間、明治三十二年五月には長女筆子が誕生している。住居はこの間に六度も変えている<sup>(42)</sup>。

第五高等学校に足掛五年勤務しつづけることができた理由の一つに、同僚に恵まれたことをあげるのは、門下生で、夏目の長女の夫松岡譲である。菅虎雄、山川信次郎、長谷川貞一郎、そして教頭として赴任して来た狩野亨吉がそのメンバーである<sup>(43)</sup>。中でも菅虎雄、狩野亨吉は夏目が勤務先を変える時にしばしば名前を出て来る人物で、それだけ夏目にとっても二人の存在は大きな意味を持った。終生の友人であったことは言うまでもない。

第五高等学校の学生は夏目をどのように評価していたのであろうか。

まず、速水滉は、夏目が第五高等学校に赴任した明治二十九年から同三十年まで一年間英語を教わった。テキストはパークの『フレンチ・リヴオリューション』で、教材としては高度なものであった。後年、速水が夏目にそのことに触れると、「あの本は今君らが読んで見てもきっと六ヶ敷いと思うに違いない。併し今僕に教えさせれば、君等をすっかり感服させるのだが。」<sup>(44)</sup>と言ったという。正規授業の他に夏目は課外授業をやり、テキストは『ハムレット』で、「この面白さは今だに印象に残っている」<sup>(45)</sup>と速水は述懐する。

夏目の授業態度については、「一体に先生の其時の感じとしては、六ヶ敷い厳格な態度で、快活な処が少なかつたように思う。生徒が下読みを怠ったりすると、可なり手厳しくやり

こめられたと覚えている。」<sup>(46)</sup>と述べ、学生からすると厳格な教師という印象が強かったことを伝えている。速水の述懐の中で注目されるのは、夏目が課外講義として行った「ハムレット」の面白さを強調していることである。夏目にとってシェイクスピアの『ハムレット』を教材として選ぶのは当然の選択であった。英文学を専攻した彼からすれば、語学の授業よりも文学の授業により強い意欲を感じたはずであったからである。教授する側が教材に対して抱く興味・関心の強さは、自然にそれを受けとめる側にも伝わるという原理が作用しているということであろう。さらに、このばあいでは、速水は通常の学生のレベルを越える知的好奇心の強い学生であったということも面白さを感じる大きな要因になっていたと想像される。

次に、内丸最一郎は、二部（注、主として工科・理科の学生が学ぶ）の学生として、夏目の英語の授業を履修した。本人の述懐によれば、英語は不得意な方の学生であった<sup>(47)</sup>。

内丸が夏目から受けた英語の授業で使われたテキストは、ジョン・ハリファックスの『ジェントルマン』と、ジェイムズの『オブ・イングリッシュブローズ』の二種であった。

この授業の印象は「怖かったが、よく解る講義で、後者（注、オブ・イングリッシュブローズ）の方にあったスコットランドの雪景を叙した文を得意で講義されたのを覚えている。」<sup>(48)</sup>というもので、先に引用した速水のばあいと比べるとテキストも違う分、その教授法も違っていたのではないかと推測される。

これにより、夏目は、教師として、教育の対象者の興味・関心・能力を考慮することの必要性を認識し、それに基づいて教材を選び、教授していたのではないかと推測されるのである。

この内丸が、教場における夏目以上に人間としての夏目に敬慕の念を抱くことになる事例を内丸自身が談話の中で明らかにしている。

内丸はいう、「其頃私が家の事情で、学資が途絶えたことを他の教授から聞かれた時、先生は或る方を通じて、自分に大学卒業迄学費を出してやろうと云われた事がある。幸にして私は其時、故郷の育英会から資金を借りられるようになったので、先生の有難い志だけをお受けして、出して頂くのを御辞退したが、今だにあの時の御厚情は感謝の念に堪えない。」<sup>(49)</sup>というのがそれである。

内丸が夏目に対して並々ならぬ感謝の念を抱く理由は二つある。彼の述懐を整理した結果であるが、その一は、内丸が二部の学生で語学を得意とする学生でなかったこと、その二は、経済的に特別余裕があるわけではないことである。とくに、その二については内丸は「自分の貧乏にも係らず」<sup>(50)</sup>と表現している。

この事例に見られるような夏目が教場外で見せる人情味は他にも事例がある。

明治三十一年、夏目が熊本市内の井川淵に、一時的に居住した頃、書生として置いた土屋忠治に対して、高等学校を終え、上京し帝国大学に進学した後まで何かと気遣っていたことが、書簡の内容によっても伺える。明治三十一年八月二十七日<sup>(51)</sup>、同三十二年四月二十日<sup>(52)</sup>、同年十二月（日は不明）<sup>(53)</sup>と書簡を送り、一人の教師としてという域を越えた配慮、温情あふれる態度を見せている。

夏目にとって、第五高等学校における教師生活は必ずしも本意に沿うものではなかったにせよ、学生達に対して彼が行った教授者としての営みは決して、表面的、形式的なもの

ではなく、具体的にあげた事例を見る限りでも、むしろ注目され、評価されてよいものであった。

その夏目に、文部省より英国への留学の命が下る。その間の経緯ならびに心境は、明治三十九年十一月に記した『文学論』の序において次のように述べている。

「余が英国に留学を命ぜられたるは明治三十三年にて余が第五高等学校教授たるの時なり。当時余は特に洋行の希望を抱かず、且つ他に余よりも適当なる人あるべきを信じたれば、一応其旨を時の校長及び教頭に申し出たり。」<sup>(54)</sup> これに対して校長及び教頭は、本人に異議があるならとも角、そうでなければ命に従うべきであると説得され、「命に従うことにした」<sup>(55)</sup>と述べている。

このようにして渡英し、ロンドンで過ごした二年にわたる留学生活は、「尤も不愉快の二年なり」<sup>(56)</sup>と云うほど悲愴なものであったが、そこで得たものから生れたのが『文学論』であるというのである。

次に見るのは、帰朝後における夏目の教師生活である。

明治三十六年一月に東京に帰着した夏目は、第五高等学校教授を依願退官する。

帰朝後の新しい職場は、友人で東京帝国大学教授大塚保治の運動で東京帝国大学文科大学英文学科で、講師として就任し、併せて、第一高等学校では、校長で友人の狩野亨吉の配慮で講師として就任した。年俸はそれぞれ八百円と七百円であった。第一高等学校で講師になったのは、第五高等学校教授という官職を辞職する手続きをとり、その結果免官となったことによる。したがって、第一高等学校は教授ではなく改めて講師から始まることになったのである<sup>(57)</sup>。

この時期に夏目の授業を受けた者の印象を次に2例紹介しよう。

まず、第一高等学校で一年次に夏目の英語の授業を受けた野上豊一郎は、次のようにその印象を述べている。

「教え方はどこまでも厳正で、少しもゴマカシがきかず、私共には実に厄介な英語であった。中略。一字の意味を分解して、あらゆる方面に応用せしめようという、謂わば語原学的な態度であった。だからそれに応じて調べをするのに随分苦しんだ。厄介至極な語学の先生だと思っていたが、それでも皆何となく先生が好きであった。」<sup>(58)</sup>

この野上は、高等学校一年の中頃で、夏目が教室にニッケル製の時計を忘れたのを自宅に届けたところ、夏目が平気で「ああ有難う」とか言っただけですぐ受取ったことを回想している<sup>(59)</sup>。野上は後に大学でも英文学を夏目より教わり、夏目の門下生の一人に数えられることになる。

東京帝国大学で英文学を教わった松浦一は夏目の印象を次のように語っている。

松浦によれば、夏目の本領が発揮されたのは二年目に当たる明治三十七からで、「先生は愈々得意の題目たる内容の方へ入って来て、例の(F + f)の議論になって来ると、何しろ小泉先生の詩のような講義ばかりに親しんでいた学生は、此の文学の原論に突込んだ、心理学的美学的乃至哲学的な理智の議論に、等しく驚異敬服して了った。」<sup>(60)</sup>と云う。

その他にシェイクスピアの講義も行い、その講義の面白さから二十番の大教室がいつも一杯だったことを回想している<sup>(61)</sup>。

しかし、授業で受ける印象とは別に夏目の日常から受ける印象として、「私の知って居



る大学奉職時代の先生は生活と思想の両方面で奮闘されていたためか、形容には段々と人生の疲れと言うような様子が加わるように見えた。」<sup>(62)</sup>と語っている。

松浦の回想で注目されるのは、学生から見ても当時の夏目には、疲労の様子が感じとれる程に精神的煩悶が深まっていたということである。

実際、明治三十八年、三十九年は神経衰弱が一進一退している時期であったし、三十八年半ば頃には以前より抱えていた「教師か文学者」かの二者択一の問題に悩むことがあった<sup>(63)</sup>。また、明治三十九年十一月には読売新聞社から入社勧めがありこの時は辞退したものの、翌年二月、朝日新聞社かあの招聘が始まり、三月に東京朝日新聞主筆池辺三山の訪問を受けた時点で朝日新聞入社を決意する<sup>(64)</sup>。三月下旬に両校に辞表を提出し、受理され発行された辞令は第一高等学校のばあい、「講師夏目金之助／依願退職／明治四十年三月二十日／第一高等学校」とある。また、東京帝国大学のばあい次のような文面になっている。「(夏目金之助) 依願東京帝国大学文科大学講師嘱託ヲ解ク、明治四十年四月二十二日／東京帝国大学」<sup>(65)</sup>

朝日新聞社との間に交わした契約書によれば、月給二百円ということである<sup>(66)</sup>。

この時期の夏目の心境を象徴的に伝えているのは、明治四十年三月二十三日付で門下生の野上豊一郎に送った書簡の次の文面である。

「世の中はみな博士とか教授とかを左も難有きものの様に申し居候。小生にも教授になれと申候。教授になって席末に列するの名誉なるは言う迄もなく候。教授は皆エラキ男のみと存候。然し、エラカラざる僕の如きは殆んど彼等の末席にさえ列するの資格なかるべきかと存じ。思い切って野に下り候。生涯は只運命を頼むより致し方なく前途は惨憺たるものに候。それにも拘わらず大学に嗜み付いて黄色になったノートを繰り返すよりも人間として殊勝ならんかと存候。」<sup>(67)</sup>

文面には彼独特の誇張があり、本心をそのまま表出しているとは言えないところも見られるものの、引用部分の末尾にある「人間として殊勝」ということばは、自己の本分を作家として生きることと決意していることばとして最も注目されなければならないであろう。

## 結 言

本論文のねらいであるところの教師夏目金之助の立体像の把握ということが、十分に達成され得たという確信はない。しかし、外面に表われている姿については、資料もかなり豊富にあることから、ある程度達成できたと思う。一言にして約するなら、職場における夏目は、きわめて優秀で、しかも厳格にして勤勉な教師であったということである。

一方、内面については、外面と違い、表われるものではないという性質が伴うため、いわば外に表出されたものを資料として、その由って生じる原因を探るということであるから、隠れているものを見つけ出すという作業が要求される。限界を感じながら、探り得たのではないかと考えられるのは、夏目にとっては、教育することを職業とする教職を自己の本分とすることはできないという考え方が、教職についての初期から断えることなく持続されていたということである。

## (注)

- (1) 明治二十二年設立の学習院教職員・生徒を包括する会。
- (2) 荒正人, 夏目漱石, 現代作家論全集3巻所収, 五月書房, 昭和三十二年, P.20
- (3) 嘉納治五郎 (1860—1938), 明治二十六年高等師範校長に就任。
- (4) 夏目漱石, 私の個人主義, 漱石全集第二十一巻所収, 岩波書店, 一九七九年, P.135
- (5) 小宮豊隆, 夏目漱石, 岩波書店, 昭和二十四年, PP.243-244
- (6) 夏目漱石, 私の個人主義 (前掲書), P.135
- (7) 小宮豊隆によれば, 教育学の単位論文として「中学改良策」を製作した。漱石全集第二十二巻, 岩波書店, 一九七九年, P.304
- (8) 夏目漱石, 中学改良策, 漱石全集第二十二巻所収, 岩波書店, 一九七九年, P.109
- (9) 同前書, P.110
- (10) 同前書, P.111
- (11) 同前書, P.111
- (12) 同前書, P.111
- (13) 同前書, P.112
- (14) 瀬沼茂樹監修, 夏目漱石, 別冊太陽所収, 平凡社, 一九八〇年, P.49
- (15) 古川久編, 夏目漱石辞典, 東京堂出版, 昭和五七年, P.42によれば, 狩野亨吉 (1865—1942) は, 四高, 五高教授を経て, 一高校長, 京大初代文科大学長となる。
- (16) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十七巻所収, 岩波書店, 一九八〇年, P.48
- (17) 夏目漱石, 私の個人主義 (前掲書), P.136
- (18) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十七巻 (前掲書), P.54
- (19) 大西祝 (はじめ) (1864—1900) の, 推薦で明治二十五年五月より東京専門学校講師となる。
- (20) 小宮豊隆, 夏目漱石 (前掲書), P.215
- (21) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十七巻 (前掲書), P.44
- (22) 瀬沼茂樹監修, 夏目漱石, 別冊太陽 (前掲書), P.51
- (23) 菅虎雄 (1864—1943) は, 五高, 三高, 一高教授を歴任し, 親友として諸事につき, 夏目に尽力。
- (24) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十七巻 (前掲書) 所収, P.58
- (25) 同前書, P.59
- (26) 同前書, P.62
- (27) 同前書, PP.64-65
- (28) 眞鍋嘉一郎談, 松山時代, 和田利彦編, 文豪夏目漱石, 所収春陽堂, 大正十年, P.27
- (29) 同前書, P.29
- (30) 同前書, PP.29-30
- (31) 松根東洋城談, 松山時代, 文豪夏目漱石 (同前書), P.235
- (32) 小宮豊隆, 夏目漱石 (前掲書), PP.292-293 に, 漱石の執筆意図が分析されている。
- (33) 夏目漱石, 愚見数則, 漱石全集第二十二巻 (前掲書), PP.211-212
- (34) 荒正人, 増補改訂漱石研究年表, 集英社, 昭和五十九年によれば, 中根重一(じゅういち)

は、福山藩の貢進生として大学南校で医学を修め、後に行政官に転じ、貴族院書記官長となる。

- (35) 夏目鏡子述松岡讓筆録，漱石の思い出，文芸春秋，一九九四，P.23
- (36) 半藤真利子，漱石の長襦袢，文芸春秋，二〇〇九，P.14
- (37) 同前書，P.14
- (38) 荒正人，増補改訂漱石研究年表（前掲書）によれば，横地石太郎は漱石の愛媛尋常中学時代の同僚で，この時点では，校長に就任している。（P.181）
- (39) 夏目鏡子述松岡讓筆録（前掲書），P.34
- (40) 同前書，P.36
- (41) 同前書，P.37
- (42) 松岡讓，漱石，人とその文学，潮文閣，昭和十七年，PP.128-129
- (43) 同前書，P.122
- (44) 速水滉談，熊本時代，和田利彦編，文豪夏目漱石（前掲書），P.36
- (45) 同前書，P.36
- (46) 同前書，PP.36-37
- (47) 内丸最一郎談，熊本時代，和田利彦編，文豪夏目漱石（前掲書），P.38
- (48) 同前書，P.40
- (49) 同前書，P.39
- (50) 同前書，P.50
- (51) 夏目漱石，書簡，漱石全集第二十七卷（前掲書），PP.102-103
- (52) 同前書，P.108
- (53) 同前書，P.117
- (54) 夏目漱石，文学論，漱石全集第十八卷所収，岩波書店，一九七九年，P.5
- (55) 同前書，P.5
- (56) 同前書，P.13
- (57) 松岡讓，漱石，人とその文学，前掲書，PP.162-163
- (58) 野上豊一郎談，大学教授時代，和田利彦編，文豪夏目漱石（前掲書），PP.65-66
- (59) 同前書，P.69
- (60) 松浦一談，大学教授時代，和田利彦編，文豪夏目漱石（前掲書），P.60
- (61) 同前書，P.61
- (62) 同前書，P.62
- (63) 小宮豊隆，夏目漱石（前掲書），PP.538-539
- (64) 同前書，P.561
- (65) 瀬沼茂樹監修，別冊太陽（前掲書），P.61
- (66) 小宮豊隆，夏目漱石（前掲書），P.556
- (67) 夏目漱石，書簡，漱石全集第二十八卷所収，岩波書店，一九八〇年，PP.178-179

追記：引用文中の旧漢字，旧仮名は新漢字，新仮名に改めたことをことわっておきたい。